

○事前研修

イーラーニング(オンライン研修)である程度、自宅にいながら応急処置や救急医療、ドーピング、英会話などを学習できた。そして、日整の瀧澤先生を筆頭に柔整師会オリンピック柔道スタッフ10名で5回にわたって入念なオンラインミーティングを開催して頂き、優秀な先生方と関わられるだけでも勉強になり、今後も大事にしたい人脈が築かれた。

○活動現場

7/27,7/30に日本武道館、7/29に講道館勤務をした。「チーム医療の中での柔道整復師の立場の確立」を目的に、スクープストレッチャーを使用しての搬送や医師の診療の補助(応急処置、止血、締め技後の落ちへの対処など)、畳に付着した血液の清掃、感染対策など幅広く対応した。チーム医療で活動するには、共通理解と共通言語を用いたコミュニケーションをとることが必須である。特に搬送方法に関しては、毎日変更事項があり、まだまだ対処に関して確立されておらず改善の余地ありということであり、我々はその最前線を経験することができた。

重度の外傷に関しては、国によってレントゲンを撮る前に整復をしてはいけないなどのルールもあり、基本的には現場で処置をせず、選手村のポリクリニックでの対処となった。さらに、我々の行動も全て常にテレビ中継されていて、世界中に発信されるという緊張感は貴重なものであった。

また、全国各地から集まった優秀な医師、PTとも協力したり情報交換したりと充実していた。

○コロナ対策

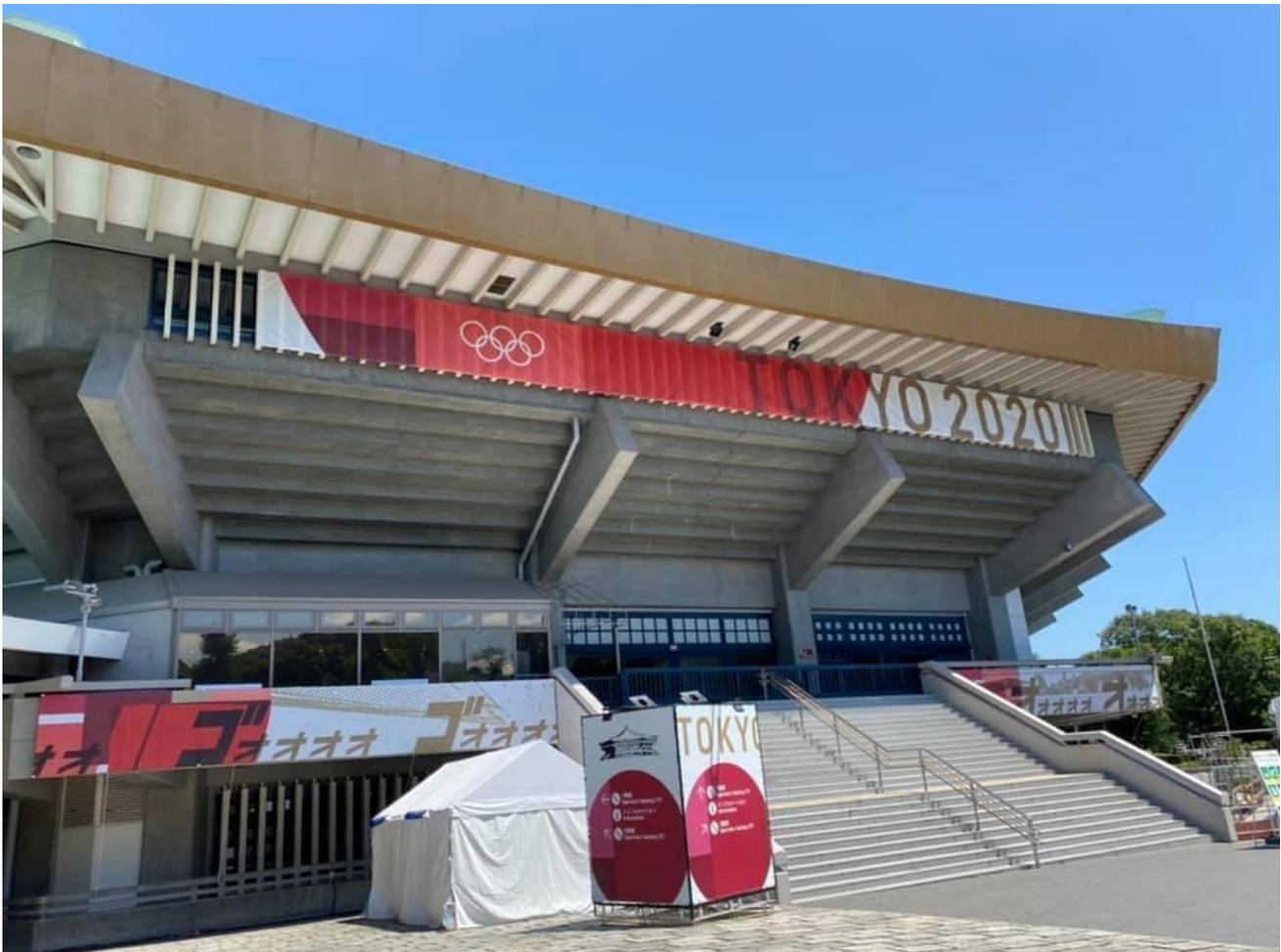
大会前、スタッフは3日に一回PCR検査の予定だったが、現地の感染者急増の影響もあり毎日の検査に変更になった。現場でも、マスク、フェイスシールド、グローブを常時装着の上、手指のアルコール消毒、畳の次亜塩素酸消毒など徹底されていた。しかし、白熱した外国人スタッフがマスクを外して大声で応援していて、注意しても聞かないケースもあり、自己防衛を徹底せねばと気が引き締まった。

業界発展のために報告せねば。

○総評

今回のオリンピックには、206の国と地域から11092名の選手が参加。そのうち、柔道競技には128もの国と地域から、393人が日本武道館に集まった。

コロナ禍での開催で、他競技救護スタッフはオリ反対派の人からADカードを引きちぎられる嫌がらせにあったとのこと。私も街ですれ違う人々から白い目で見られてヒヤッとする経験をした。開催には賛否両論あったが、このような機会に参加、貢献でき光栄である。チーム医療に参加したことで、改めて私一人では微力であり、会員の先生方のご支援のお陰で立ち得た舞台であったと実感している。



JPN 0

GER 0

2:37 GOLDEN SCORE

gorin.jp

